



TITLE:

静脩 Vol. 28 No. 1 (1991.7) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 28 No. 1 (1991.7) [全文]. 静脩 1991, 28(1)

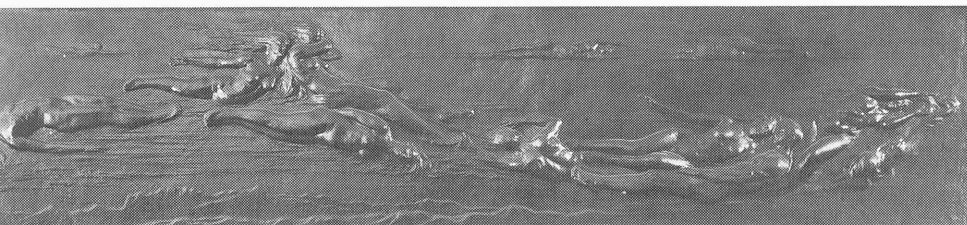
ISSUE DATE:

1991-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66000>

RIGHT:



静脩

1991年 7 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 28, No 1

古 典 籍 と 目 録

附属図書館長

西 田 龍 雄

人類の記録は、さまざまな素材で遺されている。よく知られるように、西方ではメソポタミアの粘土板からはじまり、金石、パピルス、蠟板、羊皮などを経て紙に到達した。それらの素材の形態もいろいろに変えている。東アジアの漢字文化圏でも、約6千年前の陶文からはじまって、甲骨、金石、木竹簡、帛を経て、東漢以後漸次紙の使用へと移っていった。唐代から印刷術の興起にしたがって、書籍は手写本から、雕版本へと改められ、巻軸の形から冊子体へと移行した。ごく最近になって電子メディアによる記録へと向いつゝある。

東アジアの漢字以外の文化圏では、書籍はそれぞれ特有の素材と形態をもっている。西方に拡がるチベット文字を常用する地域では、近年では冊子体が普及しつゝあるけれども、その主流は依然として、横長の紙(厚いものから薄手のものまで)一枚ごとに表裏に刷って、糊付けしないで束ねる形を取り、版木を一枚一枚刷り上げていく手工業的印刷がいまでも手堅く伝承されている。

もっとも最近では、同じ体裁の機械印刷による活字体が出回りはじめた。

インド文化の強い影響によって生まれた東アジ

アの第3の文字圏、東南アジアから雲南に及ぶ地域では、現在はそこでも冊子本が主流になってきたが、少し以前は棕櫚の葉を素材として、小刀で文字を刻むいわゆる貝葉本が常用されていた。雲南の傣族の分布地では、いまなおこの貝葉本が造られている。

昨年、雲南省の東南部、ラオスとビルマに接した西双版纳^{シーサンパンナ}傣族自治州を訪れた。さすがに亜熱帯気候で六月というのに予想を越えた暑さに閉口したが、ある寺院に行ってみると、若い僧侶が經典の見本を傍に置きながら、棕櫚の葉に経文を刻んでいた。もう20年以上も昔になるけれども、タイ国の北部のガソリンスタンドで、年輩の従業員が客を待ちながら、同じように見本にならって、棕櫚の葉に文字を刻んでいた姿を思いだした。出来上がった貝葉本のいくつかは、町の骨董屋に並ぶかも知れないと思ったりした。

近頃は少なくなったが、以前は貝葉本の鑑定を依頼されて困惑したものである。一見すると同じような体裁をとっているものの、中味は大きく違うものがある。ほとんどはインド系の文字の一つで刻まれているが、文字の組織も違うし字形も異

って、内容の判定には相当に骨が折れた。それらの文字の分布地は、小乗仏教圏とほぼ一致するが、内容は必ずしも仏教関係のものとは限らない。

要するに、貝葉本であるという体裁は似ていても、中味はさまざまで一律には扱えないのである。

わが図書館にこの種の書物が大量に持ち込まれたりすると、館員諸氏はその目録の作成に大いに当惑するに違いない。

私は西双版纳傣族の文化を支えた貝葉本にかねてから大きい興味をもっている。傣族の使うこの文字は、のちにや、改良されて来たが、本質はチェンマイの古い文字と同じ系統で、クルクルとした丸味を特徴としている。しかし、組織は複雑で読み下すのが至極むづかしい。

最近「貝葉文化」と呼ばれるように、貝葉本の果たした役割はずい分と高く評価されている。

傣族がなぜ貝葉を採用したかの経緯を説明するお話がある。それはまた記録の存在と素材としての貝葉の特質も伝えている。

「昔、一人の青年が愛する女性から離れて、太陽のもとに光明と幸福を求めて旅立った。若い二人は、芭蕉の葉にお互いの言葉を書いて鸚鵡に托して連絡する約束をする。青年が遠くに行くにつれて鸚鵡がとどける芭蕉の葉は途中で枯れて破れてしまう。青年は偶然に森の中で、小さい虫が、枯れて何年もたった棕櫚の葉の上を這いまわって、はっきりと跡をのこしているのを発見する。日に晒され雨に打たれても破れないこの葉こそ文字を刻んで永く保存するのに最適であることに気付いた。それ以後、鸚鵡は青年の消息を無事恋人にとどけることができるようになったとさ。」

青年はついに太陽の許に辿り着けなかったが、保存に耐える素材の発見は大きい収穫であったと語られる。

こ、数年この傣族の貝葉本は整理が進み、目録も作成されつゝある。内容は広い範囲にわたるが概略を記すと、天文暦法に関するもの、史書（編年史、事件記録）、法典、道德説教、宗教經典、故事伝説などがあり、全部が傣語で書かれたもの、半分が傣語で半分がパーリ語、そして全部がパーリ語のものに分けられる。

その一部はB 6版の冊子体となって、手書きの原文のほかに漢訳がついて刊行されて来たから大へん便利になった。

しかし中国で刊行されるこの種の民族古典籍の冊子体は、書名など目録作成に厄介な問題がある。もっと簡単な例から、二、三のことを述べておきたい。

手許に^{ナシ}納西族の友人からもらったB 6版の小冊子がある。実はその友人が編纂したもので、本来は納西文字で書いてあった内容を、1983年に修正されたラテン文字表記法で書き改めたものである。もちろん書物の体裁も横長の貝葉型（素材は厚手の紙）から、冊子体に変まっている。よく知られるように納西文字典籍は特別な象形字形を写実的に配置して、しかも言葉全体を書かないから、普通は^{トンバ}東巴（巫師）以外は簡単に読み下せない。友人は東巴の家系に生まれた著名な学者である。接しにくい古籍の内容が冊子体に姿を変えて世に出るのは大へん有り難い。現在中国で刊行される少数民族言語で書かれた書籍には大抵は漢語の書名が奥付についている。これは取扱い上便利である。この書には、和志武編『黑白争戦』とある（昆明、雲南民族出版社、1987）。ところが表紙の書名は『DDUQ'AIQ SVQ'AIQ』となっている。

中国少数民族言語のローマ字表記は、日本人のローマ字感覚で読むではない。たとえばこの「Q」は下降型の声調を代表していて「ク」とか「キュ」ではないし、「'」は音節の切れ目を示す附号である。必ず決まった約束がある。この書名は正しくは、『du 31 æ31 sv 31 æ31』（31は下降型声調、ちなみに納西語は4声ある。）と読む。逐語訳すると、「ドウ族の戦、ス族の戦」という意味で、漢訳書名とはそのまゝ対応しない。

この作品は、『創世神話』『降龍神話』と並んで納西文学前期の傑作といわれる物語である。光明を代表し太陽を造るドウ族と黑暗を代表し太陽の光を盗み去ろうとするス族の決戦、つまり善と悪が戦う話で、最後には光明が黑暗に打ち勝つ。

昨年大理を訪れた際、この物語を映画化するらしく、「黑白戦争」の看板をつけた撮影隊に出会った。その作品名は『黑白戦争』として定着して

いることは理解できるが、この書籍の目録はその漢訳書名をあげるだけに満足してよいのだろうか。

いまでも私の手許に漢語の奥付けのない少数民族語の刊行物があるように、近い将来、原題のみを対象としなければならない時代が来て、しかも書誌情報は正確でなければならない、つねに正しい読み方で入力しなければならないとなると、目録の作成は至極厄介な仕事になるだろう。

原題と奥付けの漢訳名の不一致にはいくつかのタイプがある。黒白戦争のように漢訳で慣用名を使うほかに、原題は具体的な内容を指しているのに、漢訳名は概括的な書名を与えているものも多い。実は上述の傣族の古典籍もその範疇に入る繁雑な例である。ここで単純な例の一つあげておきたい。

手許にこれも B 6 型の小冊子だが、漢訳奥付けでは、『西藏文法四種合編』（藏文）図称三菩札等著となっている書物がある。（第四次印刷、民族出版社、1989）しかし表紙とタイトル頁にあるチベット語書名を訳すと『三十頌・添性論とその注釈、シトゥーの口訳』トンミサンポータとグルチュ父子選著となる。1989年に4刷まで行き、全部で15万部も発行しているが、内容は専門学術書なのである（なぜそんなに多数刊行されているのかわからない）。タイトル頁の裏側にある「本書は

シガツツエ
日喀則のタシ・ゲペル寺院にある古い雕板から翻印したもの」（活字本）という書誌情報は是非付け加えていただきたい。

少なくとも特定の大学図書館では、このような古典籍の処理を十分できる人材がいることが望ましい。それには単に文字の習得だけではなくその文字と深くからんだ言葉の習得も重要なのである。

自動翻訳が進んでくると、いずれ創設されるであろう翻訳センターのような機関から外国語文献について有用な情報を得ることが可能になる。須く専門家の協力を得て、世界の文字について、世界の言語について解説と見本を提供してくれる Database の作成が必要になろう。これはさほどむづかしい仕事ではないように思える。そしてまた手にある資料をかゝえたとき、どこの文字が使われ、どこの言語が記録されているかを判定してくれる機関もほしいものである。これは国際的な機関になるかも知れない。そのような機関は、世界中に埋れる稀書珍籍を発掘する役目も果たしてくれることになるだろう。

私の所蔵する数点の貝葉本も、いずれは京大図書館に寄贈したいと思っているが、そのときには、各本の内容を判定して正しい目録が入力されることを期待している。

パリ市歴史・地誌関係資料コレクション

工学部教授

加藤 邦 男

今回、本学附属図書館に収蔵されることになった、パリ市史料、144タイトル、273冊は、特別の由緒のあるコレクションではなく、近年フランスの古書市場に流通する特にパリ市に関連した史料的价值が認められるものを、表題の名称のもとに一まとめにしたと聞いている。それは、18世紀から最近までの約250年間に出版された古書類で、その内容は雑多である。これを通覧して、建築的にみた史料的特徴の幾つかについて述べておく。

書誌的にみれば、初版本の他に、版を重ね改訂

を受けたものなどがあるが、それらの出版年別にみたタイトル数はおおよそ次の通りである。すなわち、18世紀刊行本が7タイトル（うち20世紀初頭の複写本1冊、銅版パリ大地図の復刻本1冊を含む）、19世紀前半のもの8タイトル、19世紀後半のもの55タイトル（15世紀の手稿本の刊本1冊を含む）、20世紀前半のもの62タイトル、20世紀後半のもの10タイトル、年代不詳のもの2タイトル、合計144タイトルである。また内容的にみて主なものを挙げると、通史・概説は1724年刊本か

ら1948～1956年刊本までの25タイトル、公共・記念建造物、街路、セーヌ河岸、市民生活の景観などを示す図版に特色のあるものが18世紀の木版画を含み34タイトル、歴史的景観の写真を収めているものが18世紀以前の墓碑銘類の写真(1890～1918年刊)から1940年代までの20タイトル、地図及び地誌的記述は18世紀刊行本2タイトル(うち1タイトルは復刻)19世紀刊行本4タイトルを含む21タイトルが数えられる。

パリ市は、中世以来セーヌ河を中心にして、商都 Ville (セーヌ河右岸)、国家権力中心シテ島 Cité、大学 Université (セーヌ河左岸)の3地区及びシテ島の大聖堂と各所に設立される教会堂や修道院によって、固有の相貌を具えて発展してきた。この都市についての歴史的記述は、16世紀から17世紀にかけて、「パリの古い時代の華 Le Fleur des Antiquitez」とか「パリの古い時代の舞台 Le Théâtre des Antiquitez」等の表題を付した出版物にその萌芽が存するが、その多くは古い逸話や歴史的物語によって当時の知的好奇心を満たすものであった。Henri Sauval (1623～1676)の著作は、それらに代わる本格的な歴史記述を目指し、多くの史料を調査し、伝承の聞き取り調査などの情報収集に心がけ、それらを記録的記述形式にまとめて、当時の歴史家たちの間で好評であったと言われる。その手稿がH. Sauvalの死後、修正加筆されて出版されたのが1724年刊の *Histoire et Recherches des Antiquités de la Ville de Paris*, 3vols (目録抄33)である。これは、原著者の意図とは異なり、収集された史料や情報を生のままに雑に集成しただけのものとなっているが、Sauvalの時代のパリ市を知る上で貴重な第一次史料であり、その第3巻にまとめられている文献目録は、今日では失われた史料を含んでいて、歴史書としてみると欠陥を有するものの、パリ市史研究の古典的史料であることに変わりはない。Jean Lebeuf, *Histoire de la Ville et de Tout le Diocèse de Paris*は、1754、1758年に初版が出され、内容が教会教区に限定されるが、はじめてパリ市の近郊の歴史が地誌的に研究されていて、史料的に高い価値を持つ。Fernand Bournonらの修正補筆を加えて

刊行されたものが本コレクションに入っている(目録抄21)。パリ市の建築や都市の造営に関して、中世からルネッサンスにかけての事情は、上述のH. Sauvalのほか、Germain Briceの著作(初版、1684年、目録抄6)も参照しなければならない。本コレクションには1725年刊4巻が2冊に合本されて入っている。19世紀の史料としては、Jacques-Antoine Dulaure (目録抄10)がもっとも成功を博したが、想像力を働かせ実証性に欠けるところがあって、古典的史料ではあるが、パリ市史のヒストグラフィつまり体系形成過程の一時期を画する以上の意味は少ないようである。フランス大革命百周年を記念するため公的にパリ市が企画して、かの有名なGeorges - Eugène Haussmannが主宰する *Histoire Générale de Paris* 史料叢書(目録抄16)がある。これとは別に、La Société de l'Histoire de Paris et de l'Ile-de-Franceの研究誌(1874～1933年刊、目録抄24、25)が刊行されて成果を挙げたが、パリ市史概説に関しては、18世紀の刊行本の研究的価値を減ずるものではない。20世紀に入ってからのパリ市史の著者には、Marcel PoëteやPierre Lavedanらを挙げねばならない。Marcel Poëte, *Une Vie de Cité, Paris de sa naissance à nos jours* (目録抄31、本コレクションには、第2巻と第3巻のみ入れられたが、第1巻は土木系工学教室、第4巻図録集は文学部にすでに所蔵されている。しかしコレクションとしてこの基本的史料の一部が欠けていることはいささか遺憾である)は、都市的現象を変化の過程においてとらえながら、そこに恒常的に存する一つの生命的なるものを認める独自の史観を確立し、都市的事象 fait urbain の直接的な観察を通じて全体的相貌を読みとる方法論を展開する。これは、H. Bergsonの生命的活力の持続の思想に通じ、中世美術研究におけるH. Focillonの「形の生命 Vie des Formes」との類縁性を感じさせ、また現代フランスの都市史研究に共通して認められる歴史観の原点とも言える。それは、変化における不易な生命の現れとして、都市を有機的組織 organisme と捉えようとするもので、urbanisme を city planning のような一技術ではなく、一つ

(図版説明)

上図：Boucher, Le Pont - Neuf, 1925-26所収の挿図、
F. Hoffbauer, Vue générale de Paris, en 1588. La
Cité et le Pont-Neuf en construction (Musée Car-
navalet 蔵)

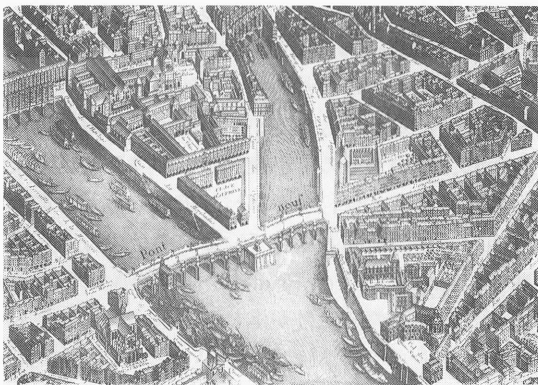
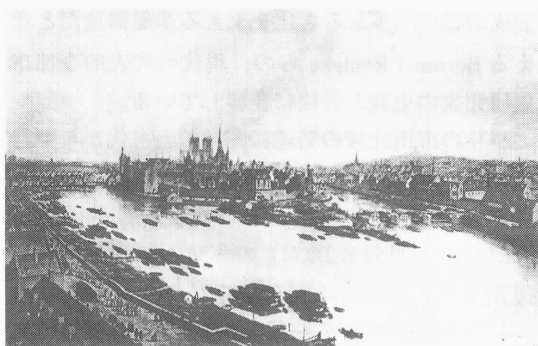
中図：Plan de Turgot - Paris 1734 (目録抄38)より
抜粋

下図：Brice, Nouvelle Description de la Ville de Paris
..., 1725所収の木版挿図(目録抄6)

上図は、セヌ河とシテ島西端部の眺めである。1578年 Henri 4世の命令によって工事が始められた2連の橋 Point - Neuf の南半分の工事現場が見える。上部に大きく空をとり、セヌ河を真ん中に広く描き出し、その中間に変化に富んだ街並のシルエットを表す構図は、近世パリ風景画の典型的な手法である。セヌ河に架かる中世の橋梁はすべてシテ島に集約されていた。すなわち Pont au Munier, Pont au Change, Pont Notre-Dame, Pont Saint - Michel, Petit Pont などは、フィレンツェの Ponte Vecchio のように、一階に店舗を並べて乗せた妻入りの家屋を両側にぎっしりと並べた形式の橋であった。中図の上方にはよりはっきりと、そのような Pont au Munier と Pont Saint - Michel が見て取れる。

中図は、同じ場所を示す Plan de Turgot の一部である。そこには Baptiste Du Cerceau 他 の設計によって建設され、1606年に完成、1613年に竣工した新しい Pont-Neuf の姿がある。これは最初の歩行者専用の橋として計画された。この2連の橋の中央にある Dauphine 広場には Henri 4世の騎馬像(1614年作、この像は現存せず。現在の像は大革命の破壊後、19世紀に復元的に改作されたもの)が建てられている。それは古代的都市景観の観念の再生であり、パリが王領の首都から絶対君主制の都の表現へ移行しつつあることを示す。この橋の上には当時仮設の大道芸の舞台や店舗が立ち、そこは市内でもっとも賑やかな盛り場であったと言う。この図には、橋梁の北から(Plan de Turgot は未だ東を上方向に向けているので、すなわち左から)第2番目のアーチに、La Samaritaine のポンプ場の建築が付設されている。なおシテ島の宮殿や右岸の Saint-Germain-l'Auxerrois 教会堂と Saint-Nicolas の古港の水運の隆盛、左岸の Collège des Quatre Nations の会堂(1661年、現在はフランス学士院)の姿が認められる。

下図の Saint - Denis 門(1672年)は、Louis 14世が東フランスの La Franche - Comté 領を征服した戦勝を記念して、パリの注文に従って、東の Saint-Martin 門(1674年)と一対に建設され、従来の古い城塞の風貌を払拭した、アカデミーの建築家 François Blondel の設計による近世的な記念建造物である。この図版には、当時の市壁が左右に、つまり東西方向に延びて描かれているのが注目される。同名の門は、16世紀までは Philippe-Auguste の市壁に、17世紀中葉までは Charles 5世の市壁に開かれていて、いずれも古来、国王たちが北方からパリに入城する重要な通路の結節点であった。



の芸術 art だと主張する Pierre Lavedan や街路網形成が都市的事象の変化を支える基礎構造だと考える Bernard Rouleau らの、現代の代表的な都市史研究家の史観と方法に発展している。

パリの市街地域の発達に関して、古代から中世にかけては復元的研究に頼るほかはない。Haussmann 主宰の Histoire Générale de Paris 叢書中にある Pachtère (目録抄16(7)) のガロ・ロマン時代の復元図や、Dulaure (目録抄10, 11) の挿図にみられる各時代の市壁、街路の復元研究は貴重である。16世紀になると街路パターンを基礎にして都市景観を3次元的に表現し、建造物の立面を傾斜して表現する一群の古地図が出現する。1525年頃に大判の壁掛け式大地図が存在したことが推定されている。これを原本として、16世紀の間にいくつかの古地図が製作されている。「綴織りの地図 Plan de Tapisserie」と称される古地図(5 m 22 × 4 m 14)もそのひとつで、1530~40年頃のパリを描いているとみられるが、現物は大革命時代に失われ、現物からの縮小複製版画がフランス国立図書館に保存され、今ではパリ市のもっとも古い様相を示す古地図となっている。中世の町並み研究で知られる Alfred Franklin (目録抄14)が残したこの地図の研究書が本コレクションに加えられている。この一群の地図はいずれも Philippe-Auguste (1180-1223) と Charles 5 世 (1270-1380) の時代に築かれた市壁をそれぞれセーヌ河の左岸(南側)と右岸(北側)に表し、市壁内はほとんど市街化されているが、都心は中世の様相をそのままに伝えていると考えられている。1652年刊の Plan de Gomboust は、透視図風にではなく、幾何学的に正確に表現され信頼性の高い画期的な地図であった。しかしパリ市が Louis Bretez に製作を依頼した1739年刊の Plan de Turgot (目録抄38) は、3 m 35 × 2 m 50の全体を20シートに分割したパリ市古地図であるが、鳥瞰的表現をとり、地図技法からみると前世紀に逆行している。けれども内容的にみると、18世紀前半期、すなわち Louis 15 世のパリの建築を知るうえで重要な資料である。パリ市はこの地図の製作者に、表現すべき教会堂、建造物、広場、噴水、公共記念物、

邸館などを指定し、約2年間にわたる測量と現地調査にもとづく高い精度を示しているからである。この地図の完全な復刻銅版図がコレクションに入っていることも特筆される。

19世紀には、Napoléon 3 世と Haussmann による大改造が行われ、パリ市はその表情を一変する。また1860年には、1818年から計画され現在の都心地域を画する市壁 Enceinte de Thiers 以内がパリ市に合併された。こうした近代の変貌以前のパリ市の景観を知ることができる資料も多数含まれている。Charles Nodier (1836年刊、目録抄27)、Victor Fournel (1858, 1879年刊)、M. F. de Guilhermy (1855年刊)、E. La Bédollière (1860年頃刊)、Société d'Iconographie Parisienne 学会誌(1908~1937年刊、目録抄35, 36)の記述、挿図、付図などである。そのほか特殊建造物、土木事業に関する19世紀から20世紀初頭のモノグラフィ研究、さらに1880年刊のパリ各区の下水道施設を示す大地図帖(目録抄2)などが注目される。

これらの史料を精査すればいろいろな発見が期待されよう。その内容は、建築工学に留まらず、都市の社会、経済、法律や日常生活の風俗に関連している。そうしてそれは、History の語源であるギリシア語の historia が示唆するように、歴史的事象の探求とともにその直接的な観察ないしは知覚と記述行為によって成立するフランス独特の歴史観の存在を実感させるのである。

参考文献：

- POETE, Marcel, Une vie de Cité, Paris de sa naissance à nos jours, éd. Auguste Picard, Paris, 1924 vol. 1, Introduction.
- LAVEDAN, Pierre, Histoire de l'urbanisme à Paris, in Histoire de Paris, 8 vols. Hachette, Paris, 1975.
- ROULEAU, Bernard, Le Tracé des rues de Paris, formation, typologie, fonction, éd. du CNRS, Paris, 1983.
- COUPERIE, Pierre, Paris au fil du temps, atlas historique d'urbanisme et d'architecture, éd. Joël Cuénot, Paris, 1968.

パリ市歴史・地誌関係資料コレクション目録(抄)

1. Atlas municipal des vingt arrondissements de la ville de Paris : dressé sous l'administration de M. Delanney / sous la direction de Louis Bonnier ; par les soins de J.-M. Petit.
--[Paris : s. n.], 1912
1 atlas (32 leaves of plates) : 16 col. plans ; 68×49cm
Scale of plans : 1 : 5,000
2. Atlas administratif des égouts de la ville de Paris, trirage 1880.
--[Paris : Service des eaux et des égouts, 1880]
1 atlas (37 leaves of plates) : 18 col. plans, ill. ; 68×51cm
Scale of plans : 1 : 5,000 and 1 : 25,000
3. Babeau, Albert, 1835—1913
Le Louvre et son histoire : ouvrage illustré de 140 gravures sur bois et photogravures, d'après des dessins, des plans et des estampes de l'époque / Albert Babeau. -- Paris : Firmin-Didot, 1895
349p. : ill. ; 30cm
4. Bonnarbot, A (Alfred)
Les rues & églises de Paris, vers 1500 ; Une fête à la Bastille en 1508 ; Le supplice du maréchal de Biron à la Bastille en 1602 / publiés d'après les éditions princeps avec préfaces et notes par Alf. Bonnardot. -- Paris : Léon Willem, 1876.
139p. : ill. ; 21cm --(Collection historique des bibliophiles parisiens)
5. Boucher, François, 1885—
Le Pont-Neuf / par François Boucher ; introduction de Henri Lavedan ; ornements de Jean-Jules Dufour. -- Paris : Goupy, c1925 2v. : ill. ; 27cm
(1) Le Pont-Neuf dans Paris
(2) Paris sur le Pont-Neuf
6. Brice, Germain, 1652—1717
Nouvelle description de la ville de Paris : et de tout ce qu'elle contient de plus remarquable / par Germain Brice. -- 8^eéd. -- Paris : Julien-Michel, Gandouin : François Fournier, 1725.
4v. in 2 : ill., maps ; 17cm
7. Burnand, Robert
L'Hôtel Royal des Invalides 1670 — 1789 / Robert Burnand. -- Paris : Berger — Levrault, 1913
xxiii, 295p. : ill. ; 26cm
8. Cain, Georges, 1856—1919
Environs de Paris / Georges Cain. -- Paris : Ernest Flammarion, [1911-1913]
2v. : ill. ; 19cm
9. Etrennes ecclésiastiques [i. e. ecclésiastiques] : historiques et topographiques de l'archevêché de Paris et des beautés que l'on y admire : ouvrage utile et dédié au clergé du diocèse. -- Paris : Chez Delalain, libraire : Desnos, [1764]
103p. : 15 maps (some col.) ; 18 × 11cm
10. Dulaure, Jacques-Antoine, 1755—1835
Histoire civile, physique et morale de Paris / par J. A. Dulaure. -- 3^eéd. , Revue et corrigée par l'auteur. -- Paris : Baudouin Frères, 1825—1826
10v. : ill. ; 18cm + 1atlas
11. Dulaure, Jacques-Antoine, 1755—1835
Histoire physique, civile et morale des environs de Paris : depuis les premiers temps historiques jusqu'à nos jours / par J. A. Dulaure. -- 2^eéd. -- Paris : Furne, 1838
6 v. : ill. ; 22cm
12. Fournel, Victor, 1829—1894
Les rues du vieux Paris : galerie, populaire et pittoresque / par Victor Fournel. -- Paris : Firmin-Didot, 1879
663p. : ill. ; 25cm
13. Franklin, Alfred, 1830—1917
Les origines du Palais de l'Institut, recherches historiques sur le Collège des quatre-nations,

- d'après des documents entièrement inédits / par Alfred Franklin. -- Paris : Auguste Aubry, 1862
xii, 205p. ; 21cm
14. Franklin, Alfred, 1830—1917
Étude historique et topographique sur le plan de Paris de 1540, dit plan de tapisserie / par Alfred Franklin. -- Paris : Auguste Aubry, 1869.
345p. : ill. ; 23cm
 15. Gore, Mrs. (Catherine Grace Frances), 1799—1861
Paris in 1841 / by Mrs. Gore ; with twenty — one highly — finished engravings, from original drawings, by Thomas Allom. -- London : Longman, Brown, Green, and Longmans, 1842
vii, 268p. : ill. ; 24cm
 16. Histoire générale de Paris : collection de document -- Paris : Imprimerie nationale, 1866-19 v. : ill. ; 35cm
 - (1) Introduction / fondée avec l'approbation de l'Empereur par le Baron Haussmann, préfet de la Seine et publiée sous les auspices du Conseil municipal
 - (2) Les anciennes bibliothèques de Paris / par Alfred Franklin. 3v.
 - (3) Atlas de la censive de l'archêveché dans Paris / Brette Armand
 - (4) Le cabinet des manuscrits de la Bibliothèque impériale / par Léopold Delisle
 - (5) Épitaphier du vieux Paris/formé et publié par Émile Raunié. 4v.
 - (6) Étienne Marcel : prévôt des marchands (1354—1358) / par F.T. Perrens
 - (7) Paris à l'époque gallo-romaine / par F.-G. de Pachtère
 - (8) Paris et ses historiens aux XIV^e et XV^e siècles / documents et écrits originaux, recueillis et commentés par Le Roux de Lincy et L.M. Tisserand
 - (9) Topographie historique du vieux Paris / par Adolphe Berty. 6v.
 17. Hourticq, Louis, 1875—1944
Paris vu du ciel : vingt-quatre planches hors texte, d'après les clichés de la Cie. aérienne française / Louis Hourticq ; ornements de David Burnand. -- Paris : Henri Laurens, 1930
69p., 24 leaves of plates : ill., plans ; 28cm
 18. Houssaye, Henry, 1848—1911
Le premier siège de Paris : an 52 avant l'ère chrétienne / Henry Houssaye. -- Paris : H. Vaton, 1876
97p. : 1 folded plan ; 17cm
 19. Hustin, Arthur, 1850—
Le Luxembourg, son histoire domaniale, architecturale, décorative et anecdotique / par A. Hustin. -- Paris : Imprimerie du Sénat, 1910—1911
2v. : ill. (1 col.), plans (some folded) : 33cm
 20. Langlois, Charles Victor, 1863—1929
Les hôtels de Clisson, de Guise & de Rohan — Soubise au Marais : (Archives et Imprimerie nationales) / par Ch. -V. Langlois. -- Paris : Jean Schemit, 1922
vii, 314 p., lii (i. e. 51) leaves of ill., 3 folded plans ; 27cm
 21. Lebeuf, Jean, 1687—1760
Histoire de la ville et de tout le diocèse de Paris / par l'abbé Lebeuf. -- [Nouv. éd.] -- Paris : Féchoz et Letouzey, 1883—1893
6v. ; 26cm
 22. Le Fèvre, Antonie Martial
Description des curiosités des églises de Paris, et des environs / par Antoine-Martial Le Fèvre. -- Paris : Chez Cl. P. Gueffier, père, libraire ; Chez P. Fr. Gueffier, fils, libraire, 1759
365p.; 17cm
 23. Les quartiers de Paris pendant la Révolution, 1789—1804 : dessins inédits de Demachy,

- Bélanger, Fragonard, Lallemand, Debucourt, L. Moreau, Schwebach, Ransonnette, Raffet, David, Prieur, Civeton, etc./texte et plans reconstitués d'après des documents inédits par G. Lenotre. -- Paris : E. Bernard. 1896 [78] leaves of plates : chiefly ill., plans ; 55×43cm
24. Société de l'histoire de Paris et de l'Ile-de-France (France).
Mémoires de la Société de l'histoire de Paris et de l'Ile-de-France. -- Paris : H. Champion.
v. : 25cm.
t. 1—27, 29—51 (1875—1930)
25. Société de l'histoire de Paris et de l'Ile-de-France (France).
Table décennale des publications de la Société de l'histoire de Paris et de l'Ile-de-France. -- Paris : H. Champion.
v. : 24cm.
1-4 (1874 / 83—1904 / 33)
26. Société de l'histoire de Paris et de l'Ile-de-France. Congrès (3rd : 1924 : Paris).
Troisième Congrès des Sociétés de l'histoire de Paris et de l'Ile-de-France. -- Paris : H. Champion, 1924.
32 p. ; 26cm
27. Nodier, Charles, 1780—1844
La Seine et ses bords/par C. Nodier ; vignette par Marville et Foussereau ; publiés par M. A. Mure de Pelanne. -- Paris : Au bureau de la publication, rue Saint-Honoré, 245, 1836
192p., [47] leaves of plates : ill., 4 folded maps ; 24cm
28. Nodier, Charles, 1780—1844
Paris historique : promenade dans les rues de Paris/par Charles Nodier, Auguste Regnier et Champion ; avec un résumé de l'histoire de Paris, par P. Christian. -- Paris : F. G. Levrault, 1838—1839 3v. : ill.; 24cm
29. Perdrizet, Paul, 1870—1938
Le calendrier parisien à la fin du moyen âge d'après le Bréviaire et les livres d'heures / Paul Perdrizet. -- Paris : Les Belles lettres, 1933
314p., ix leaves of plates : ill.; 26cm --
(Publications de la Faculté des lettres de l'Université de Strasbourg ; fasc. 63)
30. Perdrizet, Paul, 1870—1938
Le calendrier de la nation d'Allemagne de l'ancienne Université de Paris/Paul Perdrizet. -- Paris : Éditions Ophrys, [1937]
xiv, 120p., xx leaves of plates : ill.; 25cm --
(Publications de la Faculté des lettres de l'Université de Strasbourg ; fasc. 79)
31. Poëte, Marcel, 1866—1950
Une vie de cité, Paris de sa naissance à nos jours. -- Paris : Auguste Picard, 1927
v.: 26cm
2. La cité de la renaissance : du milieu du XV^e siècle à la fin du XVI^e siècle.
3. La spiritualité de la cité classique, les origines de la cité moderne : (XVI^e — XVII^e siècles).
32. Saint-Foix, M. de (German-François Poulain), 1698—1776
Essais historiques sur Paris / par M. de Saint-Foix. --
Nouv. éd., Augmentée de l'histoire de l'ordre du Saint-Esprit. --
Paris : Chez la Veuve Duchesne, 1777
4 v.; 18cm
33. Sauval, Henri, 1623—1676
Histoire et recherches des antiquités de la ville de Paris / par Henri Sauval. -- Paris : Chés Charles Moette, 1724 (Paris : Chés Jacques Chardon)
3 v. in 4 ; 39cm
34. Sellier, Charles, 1844—
Monographie historique et archéologique d'une région de Paris : le quartier Barbette / par Charles Sellier ; avec une préface d'Alfred Lamouroux. -- Paris : Albert Fontemoing, 1899

xi, 223p., 2 leaves of plates : plans (folded) ; 26cm.

(Bibliothèque de la société des études historiques ; fasc. 2)

35. Société d'iconographie parisienne.

[Bulletin]. -- Paris : A. Marty.

v.: 33cm

1-3 (1908-1910)

36. Société d'iconographie parisienne.

[Bulletin] Nouv. serie. Paris : Maurice Rousseau.

v. : 33cm

1929, 1930, 1932

37. Brière, Gaston, 1871-

Les tableaux de L'Hôtel-de-ville de Paris / Gaston Brière, Maurice Dumolin, Paul Jarry. -- Paris : Maurice Rousseau, 1937.

48p., 38p. of plates : ill.; 33cm

"Société d'iconographie parisienne"

38. Plan de Paris, commencé l'année 1734 : dessiné et gravé sous les ordres de Messire Michel-Etienne Turgot ... , achevé de graver en 1739 / levé et dessiné par Louis Bretez, gravé par Claude Lucas et écrit par Aubin. [Paris : s. n., 17-:]

[42] leaves of plates : 21 plans (copperplate); 65×49cm

教養部図書館が、変わりました。

今年度4月1日より教養部図書館は、附属図書館と同じように入館ゲートに図書館利用証を挿入し、バーを押して入るシステムとなりました。これまでは、開架図書室に入室しようとする際に学生証を預け、ロッカーのキーを受け取り、荷物をロッカーに入れて入室しなければなりませんでした。

このシステムを導入したことで荷物の持ち込みもできますし、自由に書架に接して選択し（自由接架方式といいます）閲覧席でゆっくり読むことができます。

なにより閲覧席と開架図書室とを区切っていたパーティションなどを取りはずしたことにより、今までよりずっと明るく開放的な印象を与える図書館となりました。

2階閲覧室は、今までどおり自由閲覧室として手続きなしで利用できますので、自習に読書にと御利用ください。

図書や雑誌を借りだしたい場合は、今までどおりの手続きが必要です。

また教養部図書館では、4月1日より文献複写サービスを拡大しました。

必要とする図書や雑誌が学内に無い場合、他大学

や他機関に文献複写依頼をします。（今までは国立大学への依頼のみでした。）

教養部生（1・2回生）、人間・環境学研究科院生及び教養部教職員の方について、校費払・私費払ともに依頼業務を受けつけています。

なお教養部図書館を御利用の方は、必ず図書館利用証（附属図書館と共通です）をお持ち下さい。詳細は、教養部図書館参考調査掛（内線6524）までお問い合わせください。

（教養部図書館参考調査掛）



東南アジア研究センターの図書室について

東南アジア研究センター

北 野 康 子

去る2月14日に創立25周年の記念式典が行われた東南アジア研究センターの図書室は、その創立以来、他の国内研究機関ではまとって見ることのできなかった、東南アジア地域研究の図書資料の収集を、研究活動の一環として積極的に推し進めてきた。洋図書44,960冊、和図書13,735冊、合計58,695冊（平成3年3月現在の登録数）、および、洋雑誌579種、和雑誌264種の雑誌と、その他の研究資料は、内装を新たにした旧京都織物会社の倉庫跡に所蔵されている。

〈資料の多様性〉

東南アジアに関する図書資料の特徴は、その言語と文字の多様性である。マレー半島およびミャンマーに関しては英語、インドネシアはオランダ語、インドシナ半島はフランス語、フィリピンはスペイン語と英語（米語）というように、植民地時代を通じた歴史を反映している。また、これらの地域で用いられる主な言語は、タイ語、ミャンマー語、インドネシア語、マレー語、ベトナム語、タガログ語等がある。これらのうち、タイ語とミャンマー語はローマ字以外の文字である。その他にもジャワ語、タミール語、アラビア語、中国語等の文字がある。

資料収集は、センターの研究支援のためのあらゆる主題を含むので、人文社会科学のみならず、科学技術の領域もカバーしている。資料形態も、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、および、別の建物に収容されている地図と航空写真がある。

〈現地語図書資料の収集と整理〉

昭和58（1983）年に「東南アジア現地語図書整備5年計画」が始まり、1億円の特別予算を得ることができた。現在は、その2期目が継続中である。この特別予算により、東南アジア諸語で書かれた図書の収集が開始された。現在までに目録カードも整備されて配架されているものとして、タイ語約2,900冊、インドネシア語（標準語以外も

含む）約2,800冊がある。その他に、コンピュータの冊子目録に含まれている約2,200冊分のベトナム語がある。ミャンマー語はそれ以前に寄贈されたものだが、約250冊ある。インドネシア語のマイクロフィッシュは、登録はされていないが、以前からの分も含めて約2,300ケースがある。

その他に二つの大きなコレクションを購入した。フィリピンに関するフォロンダ（Foronda）コレクションの7,000冊と、タイに関するチャラット（Charas）コレクションの9,000冊である。前者は、ルソン島北部のイロコス地方の歴史、文学、民族誌、宗教書等を含んでいる。後者は、葬式配布本（ナンスー・チェーク）と呼ばれるものが半数である。故人の記録や業績などを後世に伝えるという善行によって功德を得ようとして、葬式の出席者に配布するものであり、タイ研究者にとって貴重なコレクションである。共に冊子目録がある。

昭和61（1986）年より東南アジア諸語文献研究部門が増設され、東南アジアからカタログヤー、ビブリオグラファーを、外国人研究員として招聘することができるようになった。東南アジア諸語で書かれた図書は、わが国では和漢書でも洋書でもなく、その目録法は未開発の分野である。このほど彼らの協力により、タイ語とインドネシア語の図書の目録用のマニュアルが完成した。タイ語の図書については、センター独自のデータベースを構築しており、入力用のマニュアルも作成した。ローマ字化や、語の区切り、正書法など、その書誌データの入力には問題が多い。また、アングロサクソンの人名処理とは異なる東南アジアの人名の処理についても、東南アジア各国の国立図書館による標準化を期待する。インドネシア語に関しては、ほとんどがローマ字のデータなので、学術情報センターのネットワークの一員として入力するという責任を果たすことができるように努力し

なければならない。しかし、そのためのスタッフの数が十分でなく、余力が無いというのが現状である。

世界の学術研究機関や情報機関で生産される東南アジアに関する一次情報および二次情報の中で、東南アジア諸国自体で生産される情報が増加して

いることは意義深いことである。その情報のもつ多様性と問題点は、これらの情報の流通に関わっている、同じく非ローマ字の言語を母国語とする日本の図書館員の目が、アジアや東南アジアにももっと向けられることの必要性を主張しているのではあるまいか。

「自然科学系研究者の情報要求と利用に関する調査」の集計結果について

はじめに

本調査は、平成2年度末に附属図書館へ「電子ファイリングシステム」が導入されるにあたり、その後のサービス方法・形態を検討するための資料とすべく、実施された。

1 調査の概要

調査対象は、自然科学系で、吉田・宇治・熊取の3キャンパスに所属する研究者（教授、助教授、専任講師、助手）に限定した。

調査方法はアンケート方式とし、あらかじめ用意した回答から選択する方法と、自由記述回答とを併用した。

調査票の配布回収は各部局の図書室等を通して行い、平成3年1月22日配布、回収締切を2月8日とした。回収率は、2090部の配布に対して1473部の回答があり、70.5%となった。

2 集計結果

I 年齢・専門領域など

1（所属部局）：あなたの所属部局に該当する数字を次の表から選んで下さい。

回答項目	件数	%	回答項目	件数	%	回答項目	件数	%
1：理学部	162	11.0%	11：原エネ研	20	1.4%	21：放同セン	7	0.5%
2：医学部	103	7.0%	12：木材研	16	1.1%	22：ヘリ核セン	9	0.6%
3：附属病	86	5.8%	13：食糧研	22	1.5%	23：放生セン	8	0.5%
4：薬学部	43	2.9%	14：防災研	40	2.7%	24：環境セン	3	0.2%
5：工学部	435	29.5%	15：基礎研	13	0.9%	25：情報セン	3	0.2%
6：農学部	175	11.9%	16：ウィルス研	18	1.2%	26：超高セン	10	0.7%
7：演習林	6	0.4%	17：数理研	15	1.0%	27：遺伝子	2	0.1%
8：教養部	71	4.8%	18：原子炉	72	4.9%	28：生体セン	13	0.9%
9：化学研	72	4.9%	19：保健セン	2	0.1%	29：医療短	20	1.4%
10：胸部研	18	1.2%	20：大計セン	6	0.4%	30：保健診	3	0.2%

総合計 1473 100.0%

2（年齢）：あなたの年齢に該当する数字を下欄から選んでください。

回答項目	件数	%
0：無記入	9	0.6%
1：～30	104	7.1%
2：30～	427	29.0%
3：40～	451	30.6%
4：50～	382	25.9%
5：60～	100	6.8%
合 計	1473	100.0%

3（職名）：あなたの職名に該当する数字を下欄から選んでください。

回答項目	件数	%
1：教 授	345	23.4%
2：助教授	382	25.9%
3：専任講	103	7.0%
4：助 手	643	43.7%
合 計	1473	100.0%

4（専門領域）：あなたの専門領域に該当する数字を次の表から1つ選んで下さい。直接該当するものがない場合は最も近いものを選んで下さい。

回答項目	件数	%	回答項目	件数	%	回答項目	件数	%
0：無記入	2	0.1%	18：情報工	36	2.4%	31：生物工	107	7.3%
10：電気工	39	2.6%	19：その他工	35	2.4%	40：農化工	57	3.9%
11：機械工	42	2.9%	20：数学	56	3.8%	41：農林水	94	6.4%
12：建築工	27	1.8%	21：化学	95	6.4%	50：基礎医	61	4.1%
13：土木工	68	4.6%	22：物理学	129	8.8%	51：臨床医	160	10.9%
14：原子工	44	3.0%	23：地球科	62	4.2%	52：その他医	9	0.6%
15：物理工	19	1.3%	24：宇宙科	14	1.0%	60：薬学理	41	2.8%
16：化学工	132	9.0%	30：生物学	51	3.5%	70：複合領	52	3.5%
17：金属鉱	41	2.8%						

総 合 計 1473 100.0%

Ⅱ 情報源

5（重要情報源）：あなたの研究上、下記の各情報源の中から重要とお考えのものを、重要度の高い順に3つ選んで下さい。

回 答 項 目	1 位	1 位 %	2 位	2 位 %	3 位	3 位 %	全体	全体 %
0：無記入	2	0.1%	6	0.4%	13	0.9%	21	0.5%
1：図書	84	5.7%	254	17.2%	248	16.8%	586	13.3%
2：雑誌	1141	77.5%	197	13.4%	77	5.2%	1415	32.0%
3：学位論文	2	0.1%	9	0.6%	33	2.2%	44	1.0%
4：プレプリント	40	2.7%	96	6.5%	61	4.1%	197	4.5%
5：テクニカルレポート	9	0.6%	37	2.5%	51	3.5%	97	2.2%
6：学会報告	32	2.2%	223	15.1%	193	13.1%	448	10.1%
7：調査統計	4	0.3%	26	1.8%	43	2.9%	73	1.7%
8：牽引抄録	9	0.6%	50	3.4%	52	3.5%	111	2.5%
9：目録書誌	0	0.0%	2	0.1%	10	0.7%	12	0.3%
10：レビュー誌	17	1.2%	217	14.7%	199	13.5%	433	9.8%
11：雑誌目次	33	2.2%	96	6.5%	79	5.4%	208	4.7%
12：データベース	29	2.0%	91	6.2%	106	7.2%	226	5.1%
13：電子ネットワーク	2	0.1%	11	0.7%	24	1.6%	37	0.8%
14：ディスカッション	56	3.8%	144	9.8%	228	15.5%	428	9.7%
15：私的コミュニケーション	13	0.9%	14	1.0%	56	3.8%	83	1.9%
合 計	1473	100.0%	1473	100.0%	1473	100.0%	1473	100.0%

6（最新情報源）：あなたの専攻領域における最新の情報を収集する際に、下記の各情報源の中から有効とお考えのものを、重要度の高い順に3つ選んで下さい。

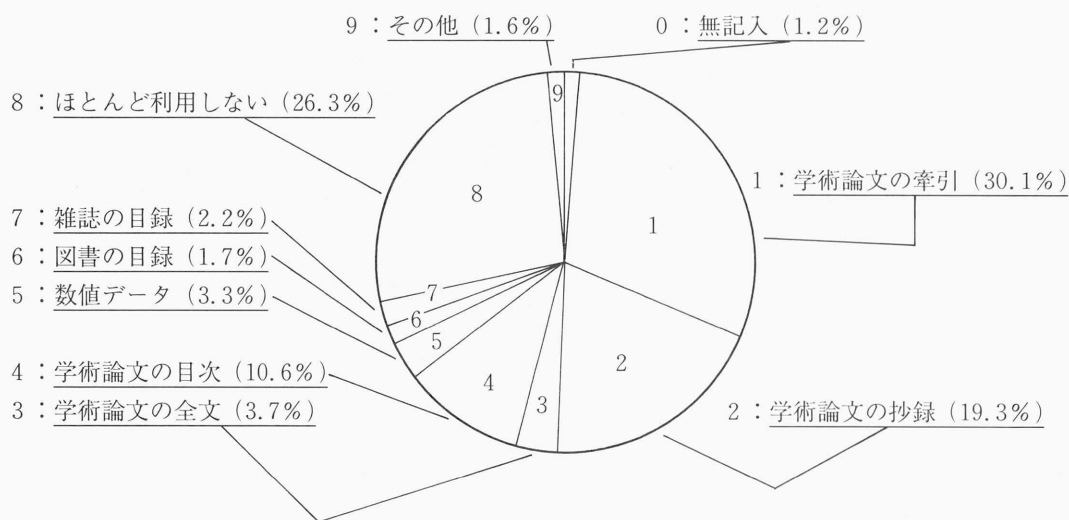
回 答 項 目	1 位	1 位 %	2 位	2 位 %	3 位	3 位 %	全体	全体 %
0：無記入	4	0.3%	6	0.4%	14	1.0%	24	0.5%
1：図書	23	1.6%	46	3.1%	61	4.1%	130	2.9%
2：雑誌	653	44.3%	272	18.5%	232	15.8%	1157	26.2%
3：学位論文	2	0.1%	9	0.6%	16	1.1%	27	0.6%
4：プレプリント	130	8.8%	141	9.6%	76	5.2%	347	7.9%
5：テクニカルレポート	14	1.0%	28	1.9%	51	3.5%	93	2.1%
6：学会報告	135	9.2%	259	17.6%	215	14.6%	609	13.8%
7：調査統計	5	0.3%	17	1.2%	33	2.2%	55	1.2%
8：牽引抄録	26	1.8%	49	3.3%	47	3.2%	122	2.8%
9：目録書誌	2	0.1%	3	0.2%	7	0.5%	12	0.3%
10：レビュー誌	23	1.6%	109	7.4%	134	9.1%	266	6.0%
11：雑誌目次	126	8.6%	145	9.8%	126	8.6%	397	9.0%
12：データベース	97	6.6%	107	7.3%	109	7.4%	313	7.1%
13：電子ネットワーク	27	1.8%	43	2.9%	43	2.9%	113	2.6%
14：ディスカッション	132	9.0%	183	12.4%	218	14.8%	533	12.1%
15：私的コミュニケーション	74	5.0%	56	3.8%	91	6.2%	221	5.0%
合 計	1473	100.0%	1473	100.0%	1473	100.0%	1473	100.0%

Ⅲ 電子メディア

Ⅲ 電子メディア 7（利用内容）

回 答 項 目	件数	百分率
0：無記入	17	1%
1：学術論文の牽引	444	30%
2：学術論文の抄録	284	19%
3：学術論文の全文	55	4%
4：学術論文の目次	156	11%
5：数値データ	49	3%
6：図書の目録	25	2%
7：雑誌の目録	32	2%
8：ほとんど利用しない	388	26%
9：その他	23	2%
合 計	1473	100%

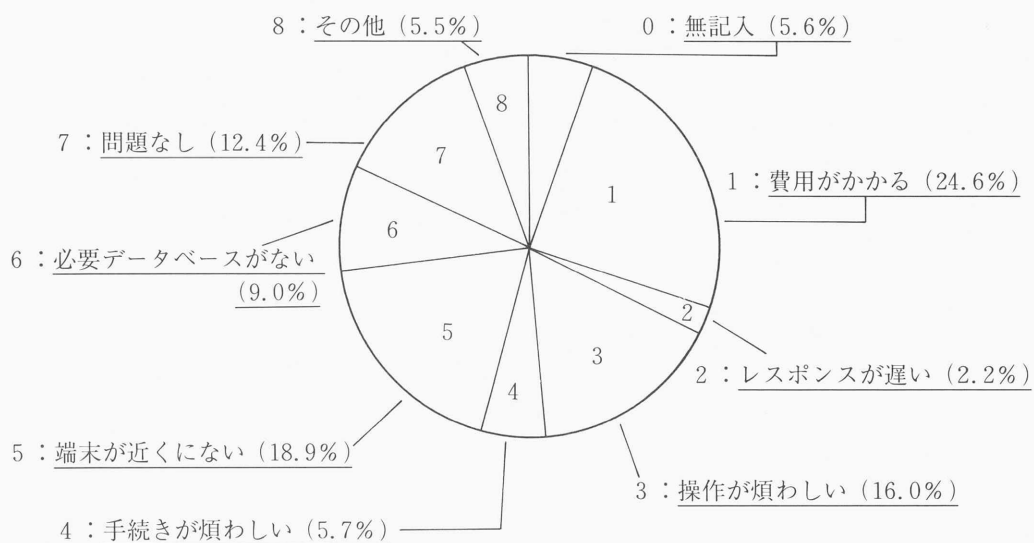
7（利用内容）：あなたが最もよく利用しているデータベースの内容はどのようなものですか。次の中から該当する数字を1つ選んで下さい。私費・公費の別、端末の設置場所は問いません。



Ⅲ 電子メディア 8（問題点）

回 答 項 目	件数	百分率
0：無記入	82	6%
1：費用がかかる	363	25%
2：レスポンスが遅い	32	2%
3：操作が煩わしい	236	16%
4：手続きが煩わしい	84	6%
5：端末が近くにない	279	19%
6：必要データベースがない	133	9%
7：問題なし	183	12%
8：その他	81	5%
合 計	1473	100%

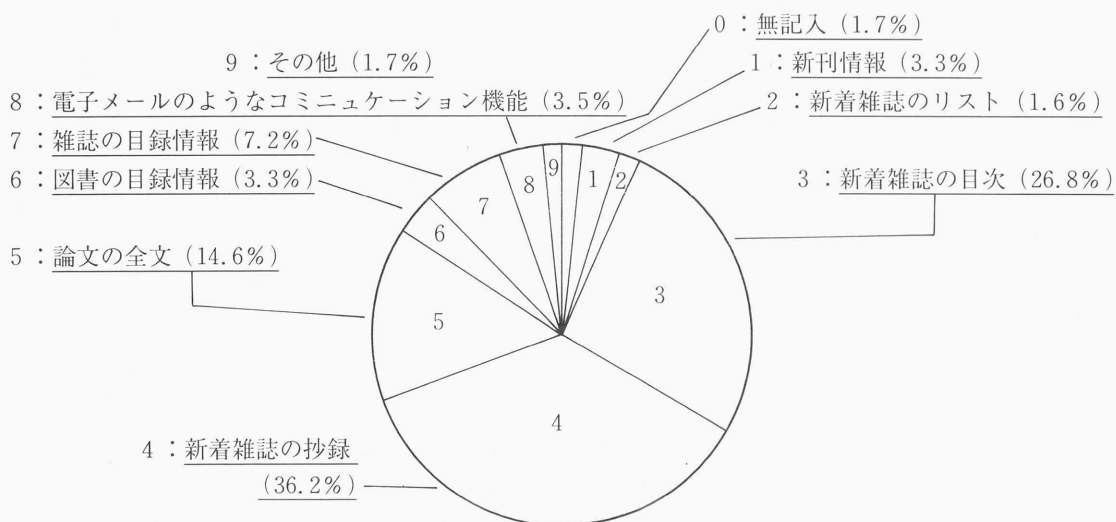
8（問題点）：データベースの利用上で、問題があると思われることについて、次の中から該当する数字を1つ選んで下さい。



Ⅲ 電子メディア 9（情報要求）

回 答 項 目	件数	百分率
0：無記入	25	2%
1：新刊情報	49	3%
2：新着雑誌のリスト	24	2%
3：新着雑誌の目次	395	27%
4：新着雑誌の抄録	533	36%
5：論文の全文	215	15%
6：図書の日録情報	49	3%
7：雑誌の日録情報	106	7%
8：電子メールのようなコミュニケーション機能	52	4%
9：その他	25	2%
合 計	1473	100%

9（情報要求）：現在の図書館資料やサービスが、もしも電子メディアで利用できるとしたら、どのようなものを最も必要としますか。次の中から該当する数字を1つ選んで下さい。



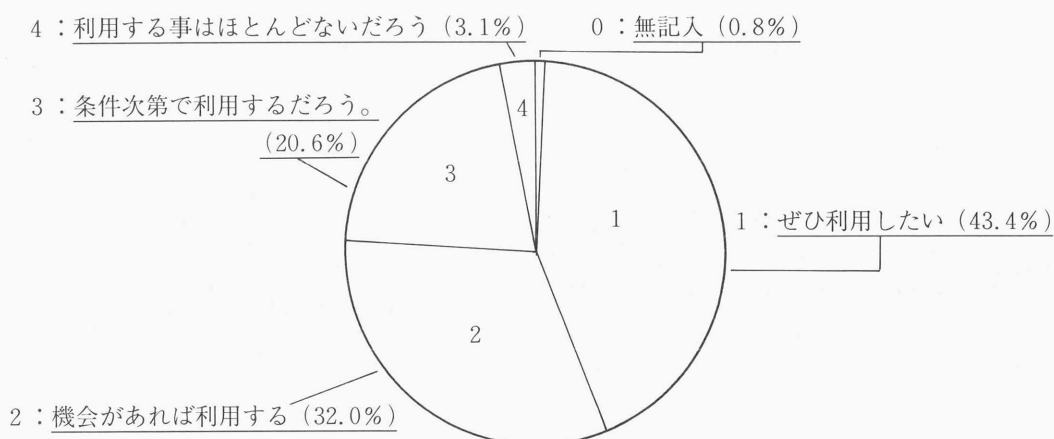
IV 電子ファイリングシステム

IV 電子ファイリングシステム 10(EFS)

回 答 項 目	件数	百分率
0：無記入	12	1%
1：ぜひ利用したい	640	43%
2：機会があれば利用する	472	32%
3：条件次第で使用するだろう	303	21%
4：利用する事はほとんどないだろう	46	3%
合 計	1473	100%

10（EFS）：電子ファイリングシステム（以下EFSと略す）についてお尋ねします。このシステムは、附属図書館が収集している理工系外国雑誌センターの雑誌の、目次と各論文の第1ページを画像データとしてデータベース化し、KUINSを通じてオンライン検索に供するものです。なお、論文の全文についてはファックスで提供いたします。平成2年度末に試験的な導入をめざしています。

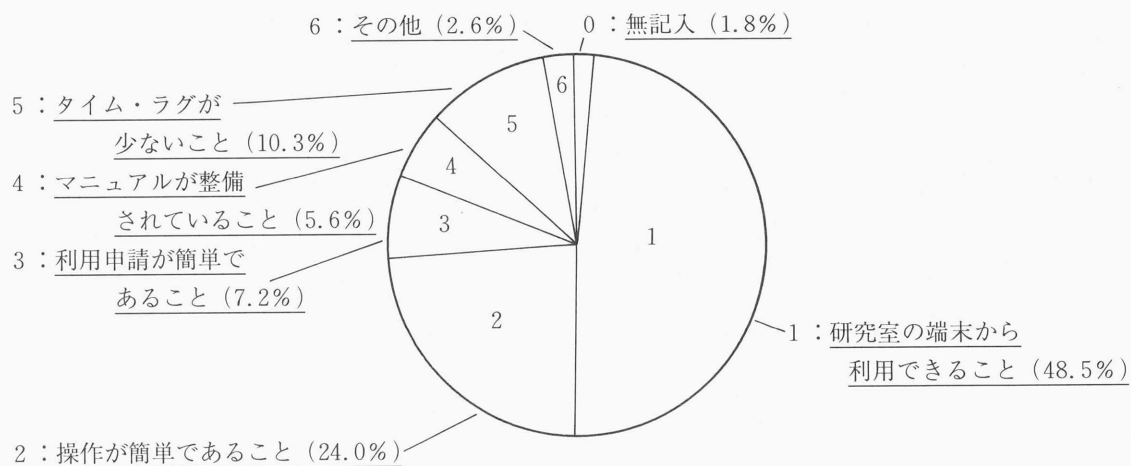
このシステムが導入された場合、あなたは利用しますか。次の中から該当する数字を1つ選んで下さい。



Ⅳ 電子ファイリングシステム 11 (必要条件)

回 答 項 目	件数	百分率
0 : 無記入	26	2%
1 : 自分の研究室の端末から利用できること	715	49%
2 : 操作が簡単であること	354	24%
3 : 利用申請が簡単であること	106	7%
4 : マニュアルが整備されていること	82	6%
5 : タイム・ラグ (雑誌新着からシステム入力までの時間) が少ないこと	151	10%
6 : その他	39	3%
合 計	1473	100%

11 (必要条件) : あなたがEFSを利用するにあたって、最も必要な条件は何ですか。次の中から該当する数字を1つ選んで下さい。



12（希望誌）：EFSの入力の対象にしてほしいとお考えの資料名を「自然系の外国雑誌」および「それ以外の雑誌、その他の資料」について、それぞれ3つまで具体的にお書き下さい。なお、恐縮ですが誌名はなるべく正確にお書き下さるようお願いいたします。

（注：雑誌は附属図書館で所蔵しているか否かを問いません。なお、理・工学系外国雑誌センターの所蔵目録が、各部局の図書室等にございます。ご参照下さい。）

自然系の外国雑誌以外の雑誌、その他の資料について、多くの回答をいただいた。和雑誌と外国雑誌は、ほぼ相半ばした。希望が比較的多かったのは、「Nature」「Science」のような一般的なものと、逆に入手の困難な会議録関係のものの2種類であった。京都大学に所属する雑誌をEFSに入力するのではなく、他機関にしかないものこそ対象にすべきだという回答もいくつかみられた。

実用的な「時刻表」「市外電話番号簿」の希望もあり、図書館側で予測していなかった利用方法がいくつかよせられた。今後、電子ファイリングシステムによるサービスの拡大の際に参考とさせていただきます。

13（その他）：附属図書館の情報サービス、あるいはEFSの入力対象誌について、意見等ございましたらお書き下さい。

最後のその他全般に対する意見は、全部で235件寄せられた。内容は、電子ファイリングシステムについてのものがやはり多くて175件あり、次いで図書館サービスに関するものが52件、その他8件であった。

電子ファイリングシステムに対する意見としては、収録誌に対する希望が66件と最も多く、次いで端末システムに関するものが25件、接続ソフトに関するものが17件、サービス内容に関するものが16件、費用に関するものが9件などとなっている。全体的に、どのようなものが収録されるのかと、どうしたら使えるのかについての質問が多く見られた。利用することはないだろうとの意見も8件よせられ、資料の一極集中化に対する懸念もよせられている。

図書館サービスに対する意見としては、もっと多くのデータベースを提供してほしいというものが、15件で最も多かった。次いで、図書館で行っている各種サービスについて、広報に力をいれるべきだという意見が12件、コピーサービスに関するものが7件、電子メディアへの対応ばかりではなく、文献そのものの充実に力をいれるべきだというものが6件あった。利用できる資料がない、資料を迅速に整理してほしいという厳しい指摘もあった反面、図書館のサービスに対する感謝の意見も2件いただいた。

12 (希望誌：自然系の外国雑誌)	全誌名1127点	総回答誌数	3546件
雑 誌 名	件数	順位	
NATURE	110	1	
PHYSICAL REVIEW	87	2	
SCIENCE	80	3	
PHYSICAL REVIEW LETTERS	67	4	
JOURNAL OF BIOLOGICAL CHEMISTRY	66	5	
JOURNAL OF THE AMERICAN CHEMICAL SOCIETY	59	6	
PROCEEDINGS OF THE NATIONAL ACADEMY OF SCIENCES OF USA	58	7	
CELL	56	8	
JOURNAL OF CHEMICAL PHYSICS	47	9	
JOURNAL OF GEOPHYSICAL RESEARCH	38	10	
JOURNAL OF APPLIED PHYSICS	30	11	
JOURNAL OF PHYSICAL CHEMISTRY	30	〃	
BIOCHEMISTRY	29	12	
PHYSICS LETTERS	28	13	
CANCER RESEARCH	25	14	
NUCLEAR PHYSICS	24	15	
JOURNAL OF FLUID MECHANICS	23	16	
PHYSICS OF FLUIDS	23	〃	
EMBO JOURNAL	21	17	
WATER RESOURCES RESEARCH	21	〃	
JOURNAL OF ORGANOMETALLIC CHEMISTRY	19	18	
THIN SOLID FILMS	19	〃	
BIOCHIMICA ET BIOPHYSICA ACTA	18	19	
JOURNAL OF PHYSICS	18	〃	
MACROMOLECULES	18	〃	
APPLIED PHYSICS LETTERS	17	20	
PHYSICA	17	〃	
PLANT PHYSIOLOGY	17	〃	
TETRAHEDRON LETTERS	17	〃	
JOURNAL OF HYDROLOGY	16	21	
JOURNAL OF POLYMER SCIENCE	15	22	
JOURNAL OF IMMUNOLOGY	14	23	
NUCLEAR INSTRUMENTS & METHODS	14	〃	
LANGMUIR	13	24	
JOURNAL OF COLLOID & INTERFACE SCIENCE	12	25	
MOLECULAR & CELLULAR BIOLOGY	12	〃	
PLANTA	12	〃	

ANNALS OF MATHEMATICS	11	26
ASTROPHYSICAL JOURNAL	11	"
A. I. CH. E. JOURNAL	11	"
BRAIN RESEARCH	11	"
CHEMICAL PHYSICS LETTERS	11	"
CIRCULATION	11	"
INVENTIONES MATHEMATICAE	11	"
JOURNAL OF MOLECULAR BIOLOGY	11	"
JOURNAL OF ORGANIC CHEMISTRY	11	"
TRANSACTIONS OF ASME	11	"
CANCER	10	27
EARTHQUAKE ENGINEERING & STRUCTURAL DYNAMICS	10	"
JOURNAL DE PHYSIQUE	10	"
NUCLEAR SCIENCE & ENGINEERING	10	"
PHYTOCHEMISTRY	10	"
TETRAHEDRON	10	"
WATER RESEARCH	10	"
BIOTECHNOLOGY & BIOENGINEERING	9	28
ENDOCRINOLOGY	9	"
GEOTECHNIQUE	9	"
JOURNAL OF CELL BIOLOGY	9	"
JOURNAL OF VACUUM SCIENCE & TECHNOLOGY	9	"
METALLURGICAL TRANSACTIONS	9	"
AMERICAN JOURNAL OF PSYCHIATRY	8	29
ANNALS OF THORACIC SURGERY	8	"
BULLETIN OF THE SEISMOLOGICAL SOCIETY OF AMERICA	8	"
GEOPHYSICAL RESEARCH LETTERS	8	"
INTERNATIONAL JOURNAL OF HEAT & MASS TRANSFER	8	"
JOURNAL OF BONE & JOINT SURGERY	8	"
JOURNAL OF EXPERIMENTAL MEDICINE	8	"
JOURNAL OF HYDRAULIC ENGINEERING	8	"
JOURNAL OF THE AMERICAN CERAMIC SOCIETY	8	"
JOURNAL OF THE ELECTROCHEMICAL SOCIETY	8	"
NEW ENGLAND JOURNAL OF MEDICINE	8	"
NUCLEAR FUSION	8	"
OECOLOGIA	8	"
SURFACE SCIENCE	8	"
WOOD SCIENCE & TECHNOLOGY	8	"
ANALYTICAL CHEMISTRY	7	30
BLOOD	7	"
BRITISH JOURNAL OF PSYCHIATRY	7	"

CHEMICAL ENGINEERING SCIENCE	7	〃
FEBS LETTERS	7	〃
GASTROENTEROLOGY	7	〃
GENES & DEVELOPMENT	7	〃
JOURNAL OF MATERIALS SCIENCE	7	〃
JOURNAL OF NEUROSCIENCE	7	〃
JOURNAL OF NUCLEAR MEDICINE	7	〃
JOURNAL OF THORACIC & CARDIOVASCULAR SURGERY	7	〃
JOURNAL OF VIROLOGY	7	〃
MATHEMATISCHE ANNALEN	7	〃
MOLECULAR CRYSTALS & LIQUID CRYSTALS	7	〃
SOLID STATE COMMUNICATIONS	7	〃
ZEITSCHRIFT FUR PHYSIK	7	〃
ACTA CRYSTALLOGRAPHICA	6	31
ACTA METALLURGICA	6	〃
AMERICAN JOURNAL OF PHYSIOLOGY	6	〃
ANGEWANDTE CHEMIE, INTERNATIONAL EDITION IN ENGLISH	6	〃
ASTRONOMY & ASTROPHYSICS	6	〃
CHEMICAL ABSTRACTS	6	〃
ECOLOGY	6	〃
JOURNAL OF CHEMICAL SOCIETY	6	〃
JOURNAL OF CHEMICAL SOCIETY, CHEMICAL COMMUNICATIONS	6	〃
JOURNAL OF CLINICAL INVESTIGATION	6	〃
JOURNAL OF COMPUTATIONAL PHYSICS	6	〃
JOURNAL OF PHARMACEUTICAL SCIENCES	6	〃
JOURNAL OF STATISTICAL PHYSICS	6	〃
JOURNAL OF THE ACOUSTICAL SOCIETY OF AMERICA	6	〃
JOURNAL OF THE ATMOSPHERIC SCIENCES	6	〃
MOLECULAR PHYSICS	6	〃
PHILOSOPHYCAL MAGAZINE	6	〃
POLYMER	6	〃
RADIOLOGY	6	〃
SOIL SCIENCE	6	〃

3 おわりに

新しいサービスを開始するにあたって、利用者の方々に対してどのような方法で行うべきかという今回のアンケートの目的は、多くの回答をいただいて、ほぼ達成できたと思われる。今後は、このアンケートの結果を踏まえて、実際のサービス開始にむけての作業を続けていきたい。

最後、調査にご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

利用者動向調査ワーキンググループ
情報サービス課 図書館専門員 谷 口 敏 夫

『国文学とコンピュータシンポジウム(第2回)』見聞録

平成二年十二月十四日東京、地下鉄を降りた所で道に迷った。十数年以前に、数度訪れた国文研(国文学研究資料館)ではあるが全く見当が付かず、長い信号を待って、わざわざ大通りを越えてしまったようである。再び、地下鉄に戻り改札の前で地図を見たが、思い出せない。所在なく振り返ると、二人の男性が階段を上っていた。後ろ姿からして、シンポジウムに参加する風体に見え、後をつけることにした。

迷った動揺がおさまリ、先行の二人を落ちついて観察してみた。一人は大型計算機センターの星野聡先生であることに気づいた。ともかく、足早に後を追ひ挨拶をした。もう一人は、大阪国際大学でタイ語のコンピュータ処理を研究されている柴山守先生であった。ずっと昔に話をしたことがある。迷ったことを星野先生にいうと、「国文研には、道をジグザグに行けば、たどり着きます」と仰った。当日の講演者に、事前に話をするのも、面はゆく感じられた。

会場には百名近くの人が集まっていた。見知った人も幾人かいた。参加者の中核、顔ぶれというものが、もう構成されている証であろう。この分野は成長しつつある。一年前の第一回の講演録では、「パソコン」の応用が柱の一つであったが、今回はその上位にあたる「ワークステーション」に話に移っている。空席を探していると、工学部の長尾真先生にぶつかった。「お話をうかがうのが楽しみです」と私。「いやなに、ボケたことしか話せへんですな」と、さらりと関西風に破顔一笑された。

今日は奇しくも、箱根を越えて京大から三人もの講演者が出ている。長尾、萩谷昌己(数理解析研究所)、星野の三先生である。この組み合わせは、シンポジウムが始まる前から、期待させるものがあつた。お三方は、この会では情報処理関係者として、捉えられていたが、各先生の論文や著書に目を通すと、すべて若き日に、哲学や文学、歴史分野に相当深く関与しておられたようで、今

回の参加もなるほどと、一人得心した。

九時すぎから夕刻五時すぎまで、ぎっしりつまつたプログラムの中心は、国文研の先生方のものである。主調は古典本文データベースを構築することの考え方と、方法論である。一番の安永尚志先生と最後の北村啓子先生とが、旧岩波古典文学大系百巻のデータベース化に関する技術的な側面を受け持たれた。まず、古典の全文がデータベース化されることは、研究者や一般読書人にはかり知れない便宜を与える。しかもCD-ROM化に現れているように、その目的はパーソナルユースにある。全文データベースは利用者が自由にアクセスでき(標準化、データ流通)、その結果を、多様な研究の展開に応用できるようになっていなければならない。その成果は今、手で持てるCD-ROMに凝縮している。

竹取物語が縦表示のオンラインKWIC牽引としてパソコンに表示されるのを見て、あらためて成果の着実な進展を味わった。

一方同館の新井栄蔵先生は、大系の古今をノートパソコン上で自由に検索する様子を非常に興味深く話されていた。国歌大観番号と歌がリンクしていく部分に将来のひろがりを感じた。しかし、含羞のあるとまどいも隠されてはいなかった。国文学に限らず、人文科学にあっては原典そのものの正確な再現性というものが、急所となるようである。新井先生の研究生生活にあっては、写本を写真にとったいわゆる影印本ですら、別の、異本と考えなければならない学風の中で過ごしてこれたようである。

そのような厳密さと標準化、そして流通の狭間になつて、今後どのような方向性を持つのか、その見極めが、なかなか難しいのではないかと、私はきままに憶測した。

共立女子大学の内田保廣先生は、近世文学を題材に、データベースの普及というものに力点を置いておられた。何よりも、カードや付箋によって処理されてきたテキストが、データベース化され

た場合の扱い易さや研究の効率のよさを、多くの人に知って味わってもらわねばならない。ご自身のパソコンライフにからめて、そこらあたりのリアルな様子を強調されておられた。

こうした国文学オリエンテッドな方向とは異なる観点から、日本語（辞書）処理そのものに関して長尾先生の特別講演があった。まず OED（オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー）第二版の CD-ROM 化の経過報告に、驚きを禁じ得なかった。二十巻二万二千頁、五十万単語、二百四十万件の引用文献の内容が、辞書の形をとりながらテキストの様に（語の用例が完全な引用文として見れる）格納されている様子は、その膨大さに圧倒される。そのような網羅性完璧性を踏まえた上で、これからの日本語の辞書は、文を一定の要素に区切る形態素解析を経て、文法情報や意味情報を、連想まで含めて扱えなければならない。もちろんこの順逆は不二のことである。多様な情報の関係性の中で、高度な形態素解析も可能となるのだから。そういう助けになる辞書という基礎があってこそ、テキストのデータベース化された結果を飛躍的な応用に導く。と、このような趣旨であった。

長尾先生のお話は、村上征勝先生（統計数理研究所）の「統計的手法による日蓮遺文の文体研究」に接したとき、さらに興味がつのった。日蓮上人の写本の真偽を計量的に判定した内容であった。動詞や名詞の使用の変化の中に、異なった文体がある。上人の佐渡流罪の数年前に現れた全体的変化とは異なる、別人の手になるものと推量される部分が、明瞭に区別できる様子が良く分かった。

さてここで、萩谷先生のお話は、抱腹絶倒のものであった。紙上ではとても再現できない。先生は数理解析研究所でソフトウェアの研究をなされている。もれ知る所では、その世界は芸術、いや魔術に近い世界らしい。あくまで伝統的な数学者ではない。その研究所で発生する悲喜こもごものお話であった。頭脳明晰な純粋数学者は、数学以外に頭を使うのを極端に嫌う、よって一般人の予測を裏切るものだが、数学者にとってコンピュータはほとんどの場合、無縁のモノらしい。しか

し便利なものは便利であり、それに気付いた先生方は少し触ってみる。それが奇想天外な利用であり、作業中に電源コードを引き抜くくらいまだましな方である。結局誰かが一人、人身御供（イケニエ）になって、一日中そういうことの後始末をしなくてはならない。パソコンの上位にあるワークステーションになると、その壮絶さは極みに達する。会場は爆笑に包まれたが、このアナロジーは、国文学と情報科学とに置き換えたとき、どうなるのか、私はいささか悩んだ。なお、先生が本論の「ワークステーション上の日本語処理」については、大部な冊子を配布されていることを、お断りしておく。「詳しくは、これを読んでおいてください」、と。

その、ワークステーションを京大の大型計算機センターの研究室においたまま、会場のパソコンから検索実験をされたのが星野先生であった。五百キロを越えて、研究室の続日本紀本文を自由に操れることの意味を実地にかみしめてみた。ワークステーションがネットワークに適しているとはいっても、興味のある仕事が実際に目の前で動くのを見るのは、始めてであった。続日本紀という、市販ベースにはのりにくく、かつ幾人かの研究者にとっては必須のデータベースが、いとも容易に、パソコンさえあれば、利用できる体制にあるのである。少数の研究者グループによる共同研究が、現代のハイテクによって活性化していく可能性が感じられた。なお、先生は古典に記された風景や天文をもとに、コンピュータ上にそのイメージを再現する研究を続けておられる。これが、学内 LAN を通していろいろなところで見られるようになる日も、近いことであろう。

さてここまで紹介して、時間は四時前。以前から知りたかったことを小さな脳髓に全て詰め込み、私の神経は麻痺してしまっていた。残りのパネルディスカッションは夢うつつで聞き終えてしまった。終了は六時頃だった。懇親会は場違いなので、ただただ片隅でひっそりとサンドイッチなど食していたが、ちょっとした機縁で館長の小山弘志先生に挨拶するはめになった。先生は、盛会であっ

たことを心から喜んでおられるご様子であった。

私は早めに失礼し、夜道を旧知の国文研情報サービス室長にともなわれ、迷路を逆戻りした。新幹線の席についたときは、ほっとした。国文学とコンピュータ。ジグザグと進展し、やがて深い森

をぬけて峰の頂に立つのであろう。

附属図書館 図書館専門員 谷口敏夫
(平成三年四月)



編集後記

- 第100号をお届けいたします。
今回は通巻100号となりましたので、巻頭言を西田館長にお願いいたしました。
- 京大は図書館内に百年史史料室を設け、創立百年記念事業の役割を分担しています、また、近々のうちに全学の蔵書が500万冊に達します。これら区切りの良い数字は一つの通過点に過ぎないかも知れませんが、これを見守る側の者としては感がい深いものがあります。

平成2年度 蔵書統計

(平成3年3月31日現在)

部 局 名	純 増 加 数 (冊)			蔵 書 累 計 (冊)		
	和 書	洋 書	合 計	和 書	洋 書	合 計
附 属 図 書 館	7,170	2,454	9,624	468,768	254,281	723,049
文 学 部	3,836	5,170	9,006	428,612	279,492	708,104
教 育 学 部	2,096	1,552	3,648	58,488	45,868	104,356
法 学 部	2,651	3,631	6,282	215,829	288,451	504,280
経 済 学 部	3,166	2,993	6,159	188,008	187,229	375,237
理 学 部	422	1,044	1,466	42,952	194,005	236,957
医 学 部	1,040	2,119	3,159	37,524	96,117	133,641
附 属 病 院	44	87	131	11,730	22,493	34,223
薬 学 部	247	891	1,138	9,940	25,018	34,958
工 学 部	1,913	4,697	6,610	126,417	230,056	356,473
農 学 部	1,861	1,756	3,617	157,092	132,974	290,066
附 属 農 場	2	32	34	580	106	686
附 属 演 習 林	228	126	354	9,100	2,372	11,472
教 養 部	6,166	5,520	11,686	278,527	239,450	517,977
化 学 研 究 所	66	702	768	7,749	30,570	38,319
人 文 科 学 研 究 所	6,129	1,223	7,352	387,475	55,208	442,683
胸 部 疾 患 研 究 所	19	225	244	1,595	4,090	5,685
原 子 エ ネ ル ギ ー 研 究 所	93	325	418	4,693	11,797	16,490
木 材 研 究 所	58	101	159	4,835	4,278	9,113
食 糧 科 学 研 究 所	13	40	53	3,914	9,509	13,423
防 災 研 究 所	349	2,968	3,317	7,574	22,904	30,478
基 礎 物 理 学 研 究 所	2,988	28,789	31,777	7,265	61,407	68,672
ウ イ ル ス 研 究 所	22	98	120	451	9,363	9,814
経 済 研 究 所	875	883	1,758	35,126	27,404	62,530
数 理 解 析 研 究 所	254	1,489	1,743	5,933	62,640	68,573
原 子 炉 実 験 所	20	674	694	13,708	27,879	41,587
霊 長 類 研 究 所	426	385	811	4,271	9,015	13,286
東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー	693	3,056	3,749	13,735	44,960	58,695
大 型 計 算 機 セ ン タ ー	345	533	878	3,398	7,768	11,166
放 射 線 生 物 研 究 セ ン タ ー	0	0	0	160	1,354	1,514
超 高 層 電 波 研 究 セ ン タ ー	0	41	41	454	2,245	2,699
ヘリオトロン核融合研究センター	7	143	150	878	2,308	3,186
環 境 保 全 セ ン タ ー	10	52	62	475	334	809
情 報 処 理 教 育 セ ン タ ー	1	9	10	224	495	719
生 態 医 療 工 学 研 究 セ ン タ ー	0	7	7	213	255	468
アフリカ地域研究センター	474	872	1,346	2,366	5,061	7,427
医 療 技 術 短 期 大 学 部	966	185	1,151	19,764	4,785	24,549
本 部	0	0	0	2,148	298	2,446
合 計	44,650	74,872	119,522	2,561,971	2,403,839	4,965,810
注 平成2年4月1日付で供用冊数に蔵書累計を合わせた。 *本部(経理部・施設部・保健診療所・学生部)						

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 28, No. 1 (通巻100号) 1991年7月31日発行 編集：静脩編集委員会
(責任者 附属図書館事務部長)発行：京都大学附属図書館 京都市左京区吉田本町 ☎075-753-2613